

中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて —キュルテペ遺跡中央トレンチ発掘調査 2023 年—

紺谷 亮一 ノートルダム清心女子大学文学部教授

山口 雄治 岡山大学文明動態学研究所助教

フィクリ・クラックオウル アンカラ大学言語・歴史・地理学部教授

Investigation towards the Understanding of the Chalcolithic Period in Central Anatolia: Excavations at the Central Trench, Kültepe, Turkey (2023)

KONTANI, Ryoichi Professor, Faculty of Literature, Notre Dame Seishin University

YAMAGUCHI, Yuji Assistant professor, Research Institute for the Dynamics of Civilizations, Okayama University

KULAKOĞLU, Fikri Professor, Faculty of Languages, History and Geology, Ankara University

1. はじめに

昨年、キュルテペ遺跡では、発掘調査隊キャンプ内に「キュルテペ遺跡ヴィジターセンター」が建設された。また現在、遺跡近郊のカイセリ〜マラティア幹線道路脇に、自然岩盤をくり抜いた洞窟状の形態をとる「キュルテペ博物館(仮称)」を建設中である。遡れば、2011年にイスタンブールのアヤ・イリニ教会で「アナトリアのプロローグ—キュルテペ／カニシュ・カールム展」が開催され、2014年にキュルテペ遺跡全体がユネスコ世界遺産暫定リストに、そして2015年にはキュルテペ遺跡出土粘土板文書群がユネスコ世界記憶遺産に登録された。これらのことは、キュルテペ遺跡が国内外から文化的に再評価されている証といえよう。

本遺跡発掘調査の初代隊長である T. オズギュッチ (Özgüç) 教授は、今日のキュルテペ遺跡研究の礎を築いた人物である。特にカールム (Karum) における長年の発掘調査では、大量の粘土板文書の検出により、アッシリア・コロニー時代におけるキュルテペ／カニシュの名を揺るぎないものにした。現隊長のフィクリ・クラックオウル教授は、カールムよりもテペに重点を置いて、発掘調査を進めている。特にアッシリア・コロニー時代以前の前期青銅器時代に焦点を当てており、テペ南西部で前期青銅器時代後半の大規模建築址を発見している。世間の注目が絶えずカールムに集まる中で、まさに英断であった。

このような状況下で我々日本隊に与えられたミッションは、「キュルテペ遺跡の起源を探る」である。

つまり、当該遺跡では未確認の銅石器時代層を明らかにすることであった。2015年以降、キュルテペ遺跡北辺、西辺に設定したトレンチの発掘調査を行い、前期青銅器時代初頭から末にかけての建築址や土器の変遷について明らかにしてきた (Kulakoğlu et al. 2020)。しかし、それよりも下層の状況については、地下水が湧き出すなど様々な障害に阻まれ、確実な銅石器時代層を発見するには至らなかった。そこで2021年には、テペ中央部のワルシャマ宮殿 (Waršama Palace) 南部直下に新たに中央トレンチを設け、ついにここで後期銅石器時代の文化層を発見した (Kulakoğlu et al. (in press); 紺谷ほか 2022, 2023)。

中央アナトリアにおける銅石器時代編年研究は、80年以上前に行われたアリシャル・ホユック遺跡 (Alişar Hüyük) の調査以降、ほぼ進展がない状態といえる。アリシャル・ホユック遺跡近郊のチャドル・ホユック遺跡 (Çadır Höyük) では銅石器時代層が確認されているが、従来の編年観を揺さぶるには至っていない。また、これらの遺跡は中央アナトリアでもクズルウルマック河以北の遺跡であり、中央アナトリア南部の考古学的状況は以前不明確なままとなっている。

2023年の発掘調査は、8月5日〜9月14日まで行った。中央トレンチを西側に拡張することで、ジグザグ大型建築址の続きを検出することを目的とした (図2)。また、ジグザグ大型建築址の下層の状況を確認するために、トレンチ南西部で深掘坑を設定し地表下約6mまで調査した。

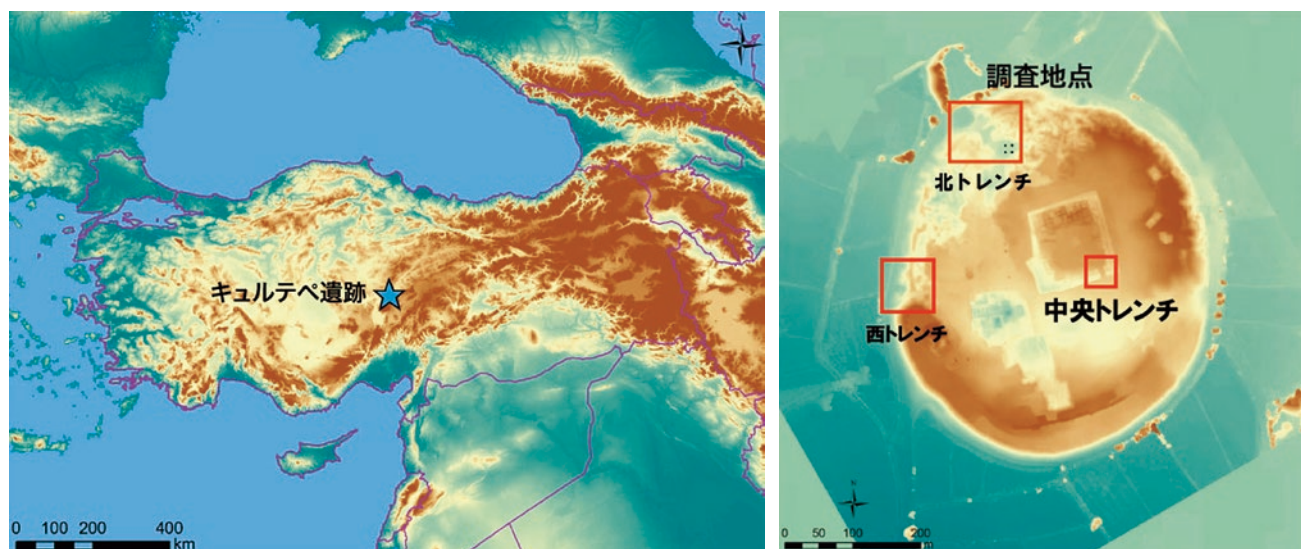


図1 キュルテベ遺跡の位置と遺跡地形測量図・調査地点
(左は SRTM3 データを使用して作成、右の地形測量図は早川祐弼氏作成)



図2 中央トレンチ遺構検出状況

2. ジグザグ大型建築址と出入口

2022年度の報告では、東西方向に伸びるジグザグ大型建築址に伴う Room1 について言及した(紺谷ほか 2023)。この部屋は、サイズの大きい日干しレンガによって構築され、壁体幅は 1.5 m、高さは床面から 3 m まで残存している。現時点において 3 枚の床面が確認でき、第 3 床面に伴う遺物として、部屋隅(南

西・北東)に大型の甕、壺が埋納されていた。この部屋に関する放射性炭素年代測定値は 3335-3026 cal BC (2 σ)であった。

今年度の調査成果として挙げられることは、当建築址に伴う南北方向に開かれた出入口の発見である。これにより、ジグザグ大型建築址のプランの一端が明らかとなった。出入口は、当該建築南側で確認された(図3)。つまり、Room1 西側が出入口から直接コリ



図3 ジグザグ大型建築址の出入口部(南から)



図4 フルーツスタンド

ドールとなっており、北に向かってやや高く傾斜している。さらに、2022年の報告でRoom1北西部のピヴォットについて言及したが、この部屋への出入口は、まさにここにあることが確実となった。

3. ジグザグ大型建築址西側の状況

2023年度の調査では、ジグザグ大型建築址のプランを明らかにする為にトレンチ区画を西側に拡張した。残念ながら表層直下から大規模なピットが出現し、当該プランの続きは、僅かしか残存していなかった。ただし、当該建築址は西側にもジグザグ形状を維持しながら続いていることが明らかになった。



図5 深掘りトレンチ遺構検出状況(南から)

4. フルーツスタンドの出土

中央アナトリアにおいては、アリシャル・ホユック遺跡の発掘調査の成果から、フルーツスタンドは後期銅石器時代の標準遺物となっている。今年の調査で攪乱層、およびジグザグ建築址と同じ文化層からフルーツスタンド片と半完形品が出土した(図4)。両者は形態がやや異なるが、いずれもアリシャル・ホユック遺跡では確認されている。今後、キュルテベ遺跡における後期銅石器時代の文化編年を構築する上で重要な遺物となりそうだ。

5. ジグザグ大型建築址の下層

調査区南西部において、ジグザグ大型建築址の下層の状況を確認するために深掘りトレンチを設定した(図5)。その結果、北側では当該建築址の基礎より約

0.5 m 下層、南側では約 2 m 下層で遺構を検出し、少なくとも 2 枚の遺構面を確認した。第 1 遺構面で検出された遺構は直径約 1.5 m の馬蹄形を呈する炉である。精良な粘土で構築されており、南側に開口部をもつ。内部には炭や炭化物が堆積しており、一部礫も含まれていた。一方、第 2 遺構面では、円形遺構が、その南側において日干しレンガ壁とその床面に接続している状況で確認された。ただし、本建築址の規模などについては今後の課題となる。年代については、円形遺構の床面から採取された炭化材の放射性炭素年代測定値として、3945-3708 cal BC (2 σ) が得られた。

2022 年度に設定した深掘りトレンチでは、出土土器の変化として黒色磨研土器から赤色磨研土器の割合が多くなることが指摘されており、その年代値として 3768-3646 cal BC (2 σ) が得られている(紺谷ほか 2023)。このように、ジグザグ大型建築址の下層には、紀元前 4 千年紀前葉から中葉にかけての活動痕跡が厚く残っていることが明らかとなった。また現時点では、未だ地山には到達していないことから、少なくとも紀元前 5 千年紀の堆積層も残っている可能性が高いと考えられる。

6. まとめ

今年の調査では、ジグザグ大型建築址が更に西へ伸びること、および出入口部の検出により建築址の構造に関する情報を得ることができた。また、当該建築址の下層には、なお厚く文化層が堆積していることも改めて明らかとなった。今後の課題としては、ジグザグ大型建築址の全体像を明らかにすることはもちろん、後期銅石器時代以前の様相を明らかにすることでキュルテベ遺跡の起源について追求していきたい。それが、

中央アナトリアにおける銅石器～前期青銅器時代の物質文化の解明とその歴史的位置づけの評価につながるものと考えている。

本研究は、JSPS 科研費 JP20K01097、MEXT 科研費 JP21H00009、RIDC2023 年度共同研究の助成を受けたものである。

参考文献

- ・ Kulakoğlu, F., R. Kontani, A. Uesugi, Y. Yamaguchi, K. Shimogama and M. Semmoto 2020 Preliminary Report of Excavations in the Northern Sector of Kültepe 2015-2017. *Subartu* 45: 9-88.
- ・ Kulakoğlu, F., R. Kontani and Y. Yamaguchi (in press) Discovering the Late Chalcolithic Period at Kültepe: Excavation of the Central Trench (2021-2022). *Subartu* 51
- ・ 紺谷亮一 2020 「趣旨説明：アナトリアにおけるメガ・シティの起源」『日本西アジア考古学会第 25 回大会要旨集』9-10 頁 日本西アジア考古学会。
(http://jswaa.org/wp/wp-content/uploads/2020/10/25thJSWAA_abstracts.pdf)
- ・ 紺谷亮一・F. クラックオウル 2022 「キュルテベ遺跡の都市性とその評価」『西アジア考古学』第 23 号 137-144 頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 紺谷亮一・山口雄治・下釜和也・フィクリ・クラックオウル 2020 「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテベ遺跡北トレンチ発掘調査 2019 年—」『第 27 回西アジア発掘調査報告会報告集』49-51 頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 紺谷亮一・山口雄治・フィクリ・クラックオウル 2021 「中央アナトリアにおける銅石器時代解明に向けて—キュルテベ遺跡北トレンチ、西トレンチ発掘調査(2020 年)—」『第 28 回西アジア発掘調査報告会報告集』59-61 頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 紺谷亮一・山口雄治・フィクリ・クラックオウル 2022 「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテベ遺跡中央トレンチ発掘調査 2021 年—」『第 29 回西アジア発掘調査報告会報告集』97-99 頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 紺谷亮一・山口雄治・フィクリ・クラックオウル 2023 「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテベ遺跡中央トレンチ発掘調査 2022 年—」『第 30 回西アジア発掘調査報告会報告集』22-25 頁 日本西アジア考古学会。